



床屋談議

桑野 巍

「うちの店はウィークデーの昼間はヒマなんです」。近隣の理髪店の店主はボヤク。店の売り上げに貢献してくれるのは主に高齢の方ともいう。65歳以上の方はウィークデーの午後4時までに入られれば500円引きにしているからと説明した。それでも店は空いていて店員の方が多い。そのせいか接客態度は良好、店長はソフトな語り口で話しかけてくる。

理髪師志望の人がだんだん少なくなっていること、お客が増えないこと、散髪期間が長くなっていること、低料金競争が激しいことなど業界の内輪話も聞いた。その昔、大手企業や役所などは社内や庁内に床屋があったが、近年こうした厚生施設を廃止する動きが急で、街の床屋に客が流れるかと思ったがそうでもなかったと悲観的な見方をしていた。

「ぼくはこの業界で20年余生きてきたが、ロングヘアにしたし。これが変ですよ」と笑っていたが、「息子は東京で同業をいそしんでいるが、東京の方が客は多く忙しいとっていた」と身内の話までする店長は優しい人で、話は自然とはずんだ。

話題がスポーツ、芸能と幅広になった。床屋での無言はかえって肩がこるが、あまり話に熱中しても仕事の邪魔になる。でも40歳代の働き盛りの青年の話の聞き役は楽しい。店長は姫路市の出身を明かしたあと「いまは大阪に住みついているので大阪^{びいき}真」という。「大阪は住み易いところなんですよ」と前置きして「ところが気にかかることも多い。それは吉本の芸人とその笑いで、すべてを評価できないですよ」と珍しく批判が飛び出した。

20数年前、大阪に出てきたころ、吉本の芸人がTVやラジオで活躍していたがこれが目新しく思わず笑ったが、いまはハナにつくという新鮮味を感じないというのだ。いまのお笑い芸人は少し過激になって「客に受けよう。人気をとろう」とばかり考えていると批判。去年起こった有名芸人の暴力事件を取り上げ、社会人としての自覚がなさ過ぎるし、思い上がりではないか、と手厳しい。

「それでも大阪弁を全国区にしたのは吉本の芸人では…」という、店長は「あれは本当の大阪弁じ

ゃない」といい「本物はエンタツ、アチャコのイントネーションでは」と反論してきた。また、人形浄瑠璃の竹本住太夫さんが「本当の大阪弁がこわされている」といっていたことも教えてくれた。

散髪が終わって睡魔が襲ってきたが、大阪弁論が出てきて目が覚めた。その時、友人にもらった「吉本語録」なるコピーを思い出した。話す必要もないのにこの語録が口に出た。きっちり覚えていないのにである。吉本の会社は芸人に対して①舞台にはなんぼでも金が落ちている。それを拾えるのは客を爆笑させた者に限る②ええもんを食え、ええ服を着ろ、ええ家に住め。そのためにはスターになれ③漫才はボケとツッコミがしっかりしてんとあかん。コンニャクみたいな裏表どっちかわからんのはあかん④下のネタで笑いをとるな。そんなのは芸とはいわぬ—などといっているらしい、と知ったかぶりをした。店長は「お客さんは若い頃何をされていたのですか」と詰問してきた。「いや、まあ」までで職業は明かさず「いま自覚と品格が必要な時代ですか」と答えておいた。

次は洗髪、シャンプーを頭にふりかけてきた時、店長は「芸人も大変ですが、役人も大変ですな。職員厚遇問題というのはよくわかりませんが、新聞を読んでいると腹が立ちます」といい、指に力が入った。納税者の怒りの力であろうか。芸能から急にシリアスな話題に移り、あまり聞きたくないと思った。彼は意見を求めてきたわけではなかったが、この問題の疑問をぶっつけてきた。

それはどうしていまごろ表面化したのか、理事者側と議会の責任、小さい政府がなぜ作れないのか、という疑問だったようだ。そして「見張り番なんて必要ない」。こんな日が早くきてほしいですね、お客さん」と呼びかけた。相づちを打とうと思ったが顔にタオルがかぶさっているので無理だった。散髪が終わって料金を支払う時、待ち合いのテーブルセット上の新聞、雑誌が目に入った。店長は情報通、その情報源はこれ、とすぐわかった。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）